

第八章 予兆

「これは局長閣下、ご多忙でありましように、わざわざご連絡を頂くとは恐縮の極みです」

外界から遮断され、分厚い壁に包まれた一室に洗練された、しかしどこか粘ついた、殷勤さの中に相手を小馬鹿にしたような声が響く。正確には声は全て壁面に吸収され、僅かなエコーすら帯びることはない。

『その肩書きで呼んで貰う必要はない。いずれ、既に知っているだろうが』

幾重にも変調されながらも、ねつい、不快な熱を帯びた声が応じる。

「存じておりますとも」

かつて数十億の有権者を魅了した微笑を浮かべながら、部屋の主の視線は、内国安全保障局長ハイドリヒ・ラングの停職を報じた電子新聞に向けられた。停職の理由は、勅命への部分的な違背とのみ伝えられ、詳細は報じられていない。

「お気の毒です。局長閣下ほど真摯に尽くしてこられた方を遇するに停職処分とは……新王朝といえども佞臣には事欠かぬようですな」

『へつらいは良い。内国安全保障局を動かすのに、局長であるか否かなど関係はないのだから』

内国安全保障局はラングが長年、手塩にかけて育て上げてきた

社会秩序維持局の後身である。オスマイヤー尚書の内務省やケスラーの憲兵隊からも多くの人員が編入され、組織構成も大きく改編されたが、その程度のことはラングにとってさしたる意味を持たなかった。局長の肩書きを身に帯びて数年、ラングは生え抜きの部下を呼び戻し、密かに要所に据え、あるいは内務省や憲兵隊の息のかかった人間を異動させている。局長の地位にあらうとあるまいと、内国安全保障局はラングの制御下にあった。

「それは同慶の極みですが……それで、今日はどのような」

『帝国大公が同盟領へ出撃した。グリューネワルト大公妃はフェザーンへの同行を断り、帝都へ残ることになった』

いずれ帝都ではなく、旧帝都と呼ばれるようになるだろうがな……通話の相手、すでにハイドリヒ・ラングその人であることは言うまでもない……は面白い冗談でも口にしたかのように嘲笑を語尾に載せた。

「ほう……それは興味深いことを伺いました。伺いましたが、まだ、今日、ご連絡を頂いた種子を伺っておりませんが？」

『先日の文理科大学の事件、あれは卿がやったことか？』

「文理科大学での事件？」

『知らぬとは言わせんぞ。あれだけの事件だ、耳に入っていないことはないだろう』

「それは……一応は。しかし、私は、ご存じの通り一介の亡命者というに過ぎません。多少の資産こそあれ、帝国政府にも何らの地位もなく、皇帝陛下の知遇を受けた身でもありません。一般的な報道で知ること以上のことを知りようもないではありませんか」

『どの口でぬけぬけと……卿がただの亡命者でないことくらい先刻承知している。まあ、おかげで、国務尚書は謹慎の身となり、小

うるさいマリィンドルフの小娘も同じ身の上だ。色々とやりやすくなったのは事実だ……ただ、勝手に動いて貰っては困る。今回のことも、私はまったく聞かされていなかった。何を企んでいる、元最高評議会議長殿？」

相手の問いかけに驚いたとしても、トリューニヒトの端正な容貌には表情のない微笑以外、何も浮かび上がりはしなかった。

「買いかぶって頂いて恐縮ですな。しかし、私も何も知りませんでした。また、どなたからも、このようなことが起こることの示唆は頂いております」

つかの間、回線は沈黙した。ラングがトリューニヒトの応答を信じたかどうか、音声のみの回線、それも多重に音声の変調の加えられた通話では察しようもなかった。

『いいだろう。卿が知らぬと言うなら、知らぬことにしておく。結果から見れば、どちらでも良いことだからな。一応、知らせておく。』

そろそろ時が来る。皇帝^{カイザー}にすれば、信頼する臣僚であったはずの國務尚書一族から国事犯が続出し、姉の大公妃にもフェザーンへの同行を拒否された。その上に、帝国大公も長期にわたってその身边から離れることになる』

「まだ、早すぎる……と考えますが」

表情を変えることなく、トリューニヒトは応じる。思いもかけぬ反論だったらしく、回線の向こう側でラングが上げたうなり声が、奇怪な遠吠えのように変調されて室内に響く。

トリューニヒトの表情が初めて変わった。瀟洒で洗練された微笑の仮面が剥げ落ち、どこことなく下卑たものを感じさせる小昏い頬の歪みが取って代わったのだ。

『早すぎるだ?!』

「さよう。私に言わせて頂ければ、新王朝を侵食するにはまだ数年の時が必要でありましょう。好機に見えるとしても、今、拙速に動けば、これまでかけて準備してきたものの全てが破綻する。國務尚書父娘が謹慎し、帝国大公とグリューネワルト大公妃が皇帝^{カイザー}の身边を離れたとしても、まだ彼らの間に實際の隙^{ひま}が生じたわけではありません。以前にも提案させて頂いた、帝国大公によるマンフレート二世御物の調査と、その目的については何かお分りになったことがあったやに聞きますが？」

『……確かに帝国大公はマンフレート二世の御物、特に卿の祖国の政治制度の研究書を念入りに調べさせている。分かっているのはそこまでだ』

「さようでありますでしょうか？」

『何を言いたい?』

僅かに怯む響きをトリューニヒトは聞き逃さなかった。

「帝国大公は自由惑星同盟の政治制度、つまり民主共和制を研究し、部分的にでも帝国へ導入しようとしている。そうではありませんか? 今、帝国は皇帝^{カイザー}ラインハルト陛下一人の資質と個性に支えられている。それを制度として維持し、皇帝^{カイザー}一人にかかる負荷を軽減^{軽くする}させる仕組みこそ、帝国大公がマンフレート二世の御物に求めるものなのではないか。私はそう愚考します。閣下にはすでにそのあたりの経緯はご承知なのではありませんか」

トリューニヒトがこれほどの長広舌を奮って反論してくるとは、ラングも予想をしていなかったらしい。再び回線が沈黙し、沈黙は長く続いた。トリューニヒトが唇に刻んだ嘲笑が深くなり、歪めた頬が嘲笑の形に小さく痙攣した。

『それで……』

切れたか、とは思わなかったが、そう錯覚させるほどの時間を
経て、漸くラングの声がスピーカを震わせた。

「私が考えるに、機会は帝国大公がその考えを公おおやけのものとしたと
きにあります」

そして、機会はもう一度ある。トリューニヒトの唇の両端が吊
り上がり、どこか作り物めいた歪な微笑いを形作った。帝国大公キ
ルヒアイスの手になる新たな政治機構が皇帝カイザーの採るところとなり、
実施に移されたときだ。たとえば、帝国に憲法のようなものが作ら
れ、部分的にでも選挙制度による選出者が行政と立法の組織を制御
し得る立場に立てるようになったとき、だ。

帝国大公……あの赤毛の坊やは、これで皇帝カイザー、幼なじみの金髪
の坊やを案にしてやれるとも思っているのだろうか、笑止な話だ。
強かな政治的動物であるトリューニヒトにしてみれば、政治とは力
と妥協と利害の交錯する永遠に継続する闘いのようなものなのだ。
一瞬でも闘いを止めれば、闘いから身を離そうとすれば、見舞われ
るのは破滅以外の何ものでもない。議会制共和制度などを借りて、
我が友の肩の荷を肩代わりさせようなど、彼から見れば児戯に類す
る発想でしかなかった。

無論、内心すべてを口に出すトリューニヒトではない。

『……なるほど、それが卿の狙いか』

ある意味で皇帝カイザー専制を是とするローエングラム王朝の政治シス
テムに真っ向から反対するような構想である。いかにキルヒアイス
が帝国大公として政府の首座にあり、かつ皇帝カイザーの腹心としてその支
持を得ようとも、帝国政府内部からの反感は小さなものではないに
違いない。

ラングがそう理解するであろうことをトリューニヒトは予想し

ていたし、それはトリューニヒト自身の理解でもあった。

「忠告はさせて頂きましたぞ、局長、いえ閣下。私の忠告、軽くお
聞きになりませんように……暴露には機会が必要です。お見誤りに
なりませんように」

『協力はせぬ、というのだな？』

「とんでもない。あなた方が失敗なされば、私も一蓮托生なのです。
軽々に暴挙に及ばれて、私が巻き添えを食わされる。それだけはご
容赦を願いたい。しかしながら、ひとたび、ことを起こされたなら
ば、私も及ばずながら力の限りを尽くさせて頂くであります。こ
れは当初よりのお約束の通り。決して違うことは致しません」

『相変わらずべらべらと調子の良いことを……だが、卿の言い様にも
聞くべき所はある。心に留めておいてやる。それに、協力すると
言ったな？』

「申し上げました」

『その言葉忘れるな』

不意に通話が切れ、回線は微かな空電を伝えるだけになった。

トリューニヒトも回線を切り、ゆっくりと身を起こす。厚いド
アを開き、隠しドアを潜って一階のサロンに出る。

そこに女性がいた。

『ご用談、終わりましたか？』

不安定な、細く高い声。定規で引いたような漆黒の長い真っ直
ぐな髪が小作りな頭部を三方向から包み、鬘を切り取ったような黒
い服装と相俟って、その姿を影絵のように見せていた。年齢は、男
女を問わず他者の年齢を見抜くに長けたトリューニヒトにすら不
明だった。一見して三〇代前半に見えるが、さらにその上に半世紀
もの時を目の当たりにしてきた老女のようにも、まだ一〇代の少女

のようにも見えるのだ。

「用談？ 何のことですか」

用心深くトリューニヒトは微笑う。自由惑星同盟の選挙民達を魅了した煽動政治家以外の姿は、すでにそこにはない。

「わたしがある人からの使者であるとお伝えしましたね、ヘル・トリューニヒト」

「聞きました。御伝言の内容も了解しました。そうお伝え願えますかな、ええと、お名前を伺っておりますでしたな、フロイライン？」

「フラウで結構ですわ、ヘル・トリューニヒト。名乗るほどの名は持ちません。どうしても仰るなら、フラウ・シュミットとでもお呼びください」

偽名です。そう名乗っているに等しい。

トリューニヒトは、疑わしげに相手の容姿を上から下へと眺め下ろす。数日前、『フェザーン自治領主^{ランデスヘル}の使い』を自称して現れたこの女性を、トリューニヒトはまったく信用していない。自分を裏づける文書の類すら一切身につけていなかったが、トリューニヒトとルビンスキーだけが知るはずの申し合わせや会談の内容について詳しく語ってみせる相手を無下に追い出すこともかなわなかった。

「では、わたしの仕事も終わったようですから、これで失礼します。何日も宿泊をお許し頂いたことに感謝致します」

「夜は過ごされたようだが、食事の一切を拒まれたと聞いております。せっかくですから最後にワインでもいかがですか。お望みとあらば、饗応の準備もさせましょう」

真紅の液体が注がれたグラスを、フラウ・シュミットを名乗っ

た女性は静かに手に取り、光に透かすようにゆっくりとグラスを揺らめかした。

「毒など入っておりませんよ。どうぞ、お近づきの印に」

微笑い、トリューニヒトは自らぐいとグラスを傾けて見せる。

「いえ、止めておきましょう」

暗く頬を走った微笑がトリューニヒトには嘲笑に見えた。

「お疑いですか。心外ですな。自治領主^{ランデスヘル}からの使者に危害を加えるべき理由など、私には欠片ほどもありません」

「知らない人からものを頂いてはいけません。母からそう教わりましたから。それに、わたしが帝都でやるべきことは一通り終わりました。これ以上、帝都に留まる理由もありません」

「どうしてもお帰りになると？ 今少し、自治領主^{ランデスヘル}のことや、それにあなた自身のこともお聞かせ願いたかったのですがね。できれば、進んでお話し頂ければと思っていました……残念です」

言い止し、トリューニヒトはぎょつとしたように立ち竦んだ。

いつの間にか、女性の、艶やかな頭頂部が彼の顎の真下にあった。漆黒の前髪が翻り、異様なほどに大きな黒瞳が、底なしの深淵を思わせて彼を至近から見据えたのだ。瞳には、虹彩も瞳孔もなかった。少なくともトリューニヒトにはそう見えた。黒い炬火というものがあるとするれば、まさにこの眸ではないか。そんな妄想すら心を過ぎった。

「余計なことはなさらないのが身のためです、ヘル・トリューニヒト」

微かに音程の外れた、高く細い、声の形をした氷の針がほとんど物理的な苦痛とともに鼓膜を突き通した。この女は声帯に他者の聴覚を害するような装置を埋め込んでいるのではないか……錯覚